



萬葉和歌集

第七

特別
~ 4
7465
7





萬葉集卷第七

雜調

詠天一首

詠月十八首

詠雲三首

詠雨二首

詠山七首

詠岳一首

詠河十六首

詠露一首

詠花一首

詠葉二首

詠蘿一首

詠草一首

詠鳥三首

思故鄉二首

詠井二首

詠^倭按琴一首

芳野作歌五首

山背作歌五首

攝津作歌二十一首

羈^族檉作歌九十首

問答歌四首

臨時作歌十二首

就^{ソレ}所發思^ス三首

寄物發思一首

行路歌一首

旋頭歌二十四首

譬喻歌

寄衣八首

寄絲一首

寄^ヤ和^リ琴一首

寄弓二首

寄玉十六首

寄山五首

寄木八首

寄草十七首

寄花七首

寄稻一首

寄鳥一首

寄獸一首

寄雲一首

寄雷一首

寄雨二首

寄月四首

寄赤土一首

寄神二首

寄河七首

寄埋木一首

寄海九首

寄浦沙二首

寄藻四首

寄船五首

旋頭歌一首

挽歌

雜挽十二首

或本歌一首

羈旅歌一首

萬葉集卷第七

雜調

詠天

天海丹雲之波立月船星之林舟榜隱所見

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

詠月

常者曾不念物乎此月之過匿卷惜夕香裳
大夫之马上振起借高之野邊副清照月夜可

聞

懷風藻
御製
船霧
楓
浪

山末爾不知與歷月乎將出香登待乍居爾與

曾降家類

明日之夕將照月夜者序因爾今夜爾因而夜

長有言明夜亦照赤今夜照

玉垂之小簾之間通獨居而見驗無暮月夜鴨

春日山押而照有此月者妹之庭母清有家里

海原之道遠鴨月讀明少夜者更下乍

百師木之大宮人之退出而遊今夜之月清左

夜于玉之夜渡月乎將留爾西山邊爾塞毛有

糠毛

此月之此間來者且今跡香毛妹之出立待乍

將有

真十鏡可照月乎白妙乃雲香隱流天津霧鴨

久方乃天照月者神代爾加出反等六年者經

去乍

烏玉之夜渡月乎何怜吾居袖爾露曾置爾鷄

類

ミナソコノタマヘキヨクニツヘクモテルツキヨカモヨノフケユケハ

水底之玉障清可見裳照月夜鴨夜之深去者

シモクモリストニカアラムヒサカタノヨワタルツキノミエヌ

霜雲入為登爾可將有久堅之夜度月乃不見

オモハ

念者

ヤノハニイサヨフツキヲイツトカモワカニチツラムヨハ

山末爾不知夜經月乎何時母吾待將座夜者

フケニツ

深去乍

イモカアタリワカソテフラムコノマヨリイテクルツキニクモナタナヒキ

妹之當吾袖將振木間從出來月爾雲莫棚引

ユキカクルトモヲヒロキオホトモニクニサカヘムトツキハテラ

朝懸流伴雄廣伎大伴爾國將榮常月者照良

大伴撰津
國地名

思

詠雲

アナシカハカハ十三タキヌ山和城上郡纏向珠城宮在日代宮在云此処

痛足河河浪立奴卷目之由觀我高仁雲居立

ルラシ

有良志

アヒキノヤニカハノセノナルナヘニユツキカタケクモタチワタル

足引之山河之瀨之響苗爾弓月高雲立渡

右二首柿本朝臣人磨之歌集出

オホウミニシモアラナクニウナハラノタユタウナニタチルシラクモ

大海爾島毛不在爾海原絶塔浪爾立有白雲

右一首伊勢從駕作

オホウミニシモアラナクニウナハラノタユタウナニタチルシラクモ

痛足河大和城
上郡也下六張
裏云卷向之病
足之河云
卷向在城上
郡

古史記麻波年
久能比志呂乃
依
姓氏錄卷標
新撰万葉集
木牟磨見三原
居一本也

山和城上郡纏向珠城宮在日代宮在云此処

詠雨

ワキモ コカ イカモノスソノ ソメヒキム ケフ ノ コサメ ニ ワレ
吾妹子之 赤裳裙之 將染渥 今日之 霰露爾 吾

共所沾者

トホルヘキアメハ ナ フリソ ワキモコ カ カタミノ コロモワレシタニ キ
可融雨者 莫零吾妹子之 形見之服 吾下爾 著

有 言不可湿下衣也

詠山

ナルカミノ オトニノ ミキクマキモクノ ヒ ハラノヤマヲ ケフ ミ ツルカモ
動神之音耳聞 卷向之 檜原山乎 今日見 鶴鴨

三毛侶之 其山奈美爾 兒等手乎 卷向山者 繼

古史記 日本記
ナトイモカチ
ツルニカチ
我子ヲイモ
ニカシメトヨメル

同シ

之宜霜

ワカキヌノイロキ ソメタリウマサカケミ ムロノヤマノモミチ
我衣色服 深味酒 三室山 黄葉為在

右三首 柿本朝臣 入磨之歌 集出

三諸就 三輪山 見者 隱口乃 始瀬之 檜原所念

鴨

昔者之事 波不知乎 我見而 毛久成 奴天之 香

具山

吾勢子乎 乞許世 山登人者 雖云君 毛不來 益

衣恐庭之誤

真洲云就 蓋能
之誤草書相
相近且檢此
集中家三諸
能之詞也

和名抄大和國
高市郡巨勢

梯上櫛皆也為
云益四直櫛之
詞

山之名爾有之

木道爾社妹山在云櫛上二上山母妹許曾有

來

詠岳

片崗之此向峯推時者今年夏之陰爾將比疑

詠河

卷向之病足之川由往水之絕事無又反將見
黒玉之夜去來者卷向之川音高之母荒足鴨

尚之義卷下
十七

疾

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

大王之御笠山之帶爾為流細谷川之音乃清

也疑左

今敷者見目屋跡念之三芳野之大川余行乎

今日見鶴鴨

馬並而三芳野河乎欲見打越來而魯瀧爾遊

鶴

音聞目者未見吉野河六田之與杼乎今日見

鶴鴨

河豆鳴清川原乎今日見而者何時可越來而

見乍偲食

泊瀨川白木綿花爾墮多藝都瀨清跡見爾來

之吾乎

泊瀨川流水尾之湍乎早井提越浪之音之清

又

水尾又或作水
脈水之脈絡也
常流云和名形
云揚氏漢語形
云水
麻船美乎比岐
能布祢

佐檜乃熊檜隈川之瀨乎早君之手取者將緣

言毳

湯種時荒木之小田矣求跡足結出所沾此水

之湍爾

古毛如此聞乍哉偲兼此古河之清瀨之音矣

波禰蘊今為妹乎浦若三去來率去河之音之

清左

此小川白氣結瀧至八信井上爾事上不為友

神名式大和國添
上郡率川坐夫
神御子神社
三座
事上不可解真
淵云蓋事
上流益事
音乎
神代卷吹出

佐檜隈既出
第二高市郡
也
檜隈亦在回
郡見和名抄

湯者赤月之訓
言時種之時祝
其種也

氣噴云云上言雖不登噴而走井激出也

誘之義 九和

足小(日本紀古事記) 足鈴(金距等是)

防田水小堤也

ワカヒモシ イモカテ モチテ ユフハ カハ タカヘリ ミム ヨロツヨ マ テニ
吾^{イモカ} 紉^{ヒモ} 乎^{ユフ} 妹^ハ 手^カ 以^{ウチ} 而^シ 結^{イニ} 八^{大和} 川^ミ 又^ニ 還^{ヒト} 見^ミ 萬^ミ 代^ト 左^ミ 右^キ 荷^ト
妹^{イモカ} 之^{ヒモ} 紉^{ユフ} 結^ハ 八^カ 川^{ウチ} 内^シ 乎^{イニ} 古^ヘ 之^ノ 井^ミ 人^ト 見^ミ 等^キ 此^コ 乎^レ 誰^タ 知^レ
コラ

詠露

ヌハタニノ ワカク ロカ ミニ フリナ ツム アマノ ツユ シモト レハ キエツ
烏^ヌ 玉^{ハタ} 之^ニ 吾^{ワカ} 黑^ク 髮^ロ 爾^カ 落^ミ 名^ニ 積^{フリ} 天^ナ 之^ノ 露^{ツム} 霜^{アマ} 取^ノ 者^{ツユ} 消^シ 乍^{モト}

詠花

アサリス スト イソニ ミ シ ハナ カセ フ キテ ナ ミハ ヨル トモト ラ スハ
島^{アサ} 廻^{リス} 爲^{スト} 等^{イソ} 磯^ニ 爾^ミ 見^シ 之^ハ 花^ナ 風^カ 吹^セ 而^フ 波^キ 者^テ 雖^ナ 縁^ミ 不^ハ 取^ヨ
不^ヤ 止^ニ

詠葉

イニヘニ アリ ケム ヒト モ ワカ コト カ ミ ワ ノ ヒ ハ ラ ニ カ サシ
古^{イニ} 爾^ヘ 有^ニ 險^{アリ} 人^{ケム} 母^{ヒト} 如^モ 吾^{ワカ} 等^{コト} 架^カ 彌^ミ 和^ワ 乃^ノ 檜^ヒ 原^{ハラ} 爾^ニ 挿^カ 頭^{サシ}

折兼

ユクカ ハノ スキ ユク ヒト ノ タ ヲ ラ 子 ハ ウ ラ フ レ タ テ リ ミ ワ ノ ヒ
往^{ユク} 川^カ 之^{ハノ} 過^{スキ} 去^{ユク} 人^{ヒト} 之^ノ 手^タ 不^ヲ 折^ラ 者^ハ 裏^ウ 觸^ラ 立^フ 三^レ 和^タ 之^テ 檜^リ
原^{ハラ} 者^ハ

右二首柿本朝臣人麿之歌集出

詠蘿

ヨシ ス ソ ア シ 子 カ ミ 子 ノ コ ケ ム シ ロ タ レ カ ラ リ ケ ム タ テ ア ヌ キ ナ シ ニ
三^{ヨシ} 芳^ス 野^ソ 之^ア 青^シ 根^ソ 我^カ 峯^ミ 之^子 蘿^ノ 席^コ 誰^ケ 將^ム 織^シ 經^ロ 緯^タ 無^レ 二^ニ

詠草

妹所等我通路細竹為酢寸我通靡細竹原

詠鳥

山際爾渡秋沙乃往將居其河瀨爾浪立勿湯

目無名抄源賴政云ノホル月ノ光リニ横キレテ渡ルアキサノ音ノサムケサ

佐保河之清河原爾鳴知鳥河津跡二忘金都

毛ナクニ

佐保河爾小驟千鳥夜三更而爾音聞者宿不

難爾不宿難國教

夫木十七長明哥
ひれからみは
あまのこ
のののの

思故郷

清湍爾千鳥妻喚山際爾霞立良武甘南備乃

里サト

年月毛未經爾明日香河湍瀨由渡之石走無

詠井

隕田寸津走井水之清有者度者吾者去不勝

可聞カモ

安志妣成榮之君之穿之井之石井之永者雖

飲不飽鴨

詠和琴

琴取者嘆先立蓋毛琴之下樋爾孀哉匿有

芳野作

神左振磐根已凝敷三芳野之水分山乎見者

悲毛

皆人之戀三吉野今日見者諾母戀來山川清

見

夢乃和太事西在來寤毛見而求物乎念四念

見

能野川石迹柏等時齒成吾者通萬世左右二

山背作

氏河齒與杼湍無之阿自呂人舟召音越乞所

聞

冬暮有頽葛葛當
訓麻仇紀都良
此集中文有冬
暮者頽葛云
之哥六師引
其作云云

者
言人曰夢之知太唯云夢之語而已非實夢凡解事尔之有計利之語皆如此
○撰津国風土記八田部郡兒餓一名夢日本紀兒餓古事紀并賀野
○濟三夢乃和太湍登波奈良受天

置細代水之人也

氏河爾生管藻乎河早不取來爾家里裹為益

緒ウチカハニ オフルスカモ ヲ カハ、ロミトラ、キニケリ ヲトニ

氏人之譬乃足白吾在者今齒王良增木積不ウチヒトノ タトヘノ ア ジロワレナレハ イマハ キミラ ソコ ツミコ

來友ストモ 言積未則倚細代今在此則雖木積未未寄思也

氏河乎船令渡呼跡雖喚不所聞有之檝音毛ウチカハヲ フ子ワタセ ヲ ト ヨハトモキコヘサ ル ラ シ カチノキトモ

不為セス

千早人氏川浪乎清可毛旅去人之立難為チハヤヒトウチカハ ナミヲ キヨシカ モ タヒユクヒトノ タチカテニスル

攝津作

直淵至悲世
之誤 生即イ
然則世良增
三字宜割与
良麻志

志長鳥居名野乎來者有間山夕霧立宿者無為シナカトリ井ナ ソヲクレハ アリマ ヤミユフキリタチヌヤトハ ナク
シテ 豊島郡 ヲテ

一本云猪名乃浦迴乎榜來者井ナノ ウラワヲ コギクレハ

武庫河水尾急嘉赤駒是何久激沾祁流鴨ムコ カハノミツヲ ハヤミカ アカコノア 足撥カ義 ソ、キニヌレニケル カモ

命幸久吉石流垂水水糸結飲都イノチサキヒサシキヨシモハナクタルミノミツヲ ムスヒテノミツ

作夜深而穿江水手鳴松浦船梶音高之水尾サヨ フケテ ホリエ コク ナルマツラ フ子カチオトタカニ ミヲ

早見鴨ハヤミ カモ

悔毛滿奴流塩鹿墨江之岸乃浦回從行益物クヤシクモ ミチヌル シホカ故スミノエ ノ キレノ ウラワ ニ ユカマシモノ

流疑激

之久無心

御凡梅前後
皆賦名兒者
傳寫之唯此
哥作吾兒誤
宜作名兒右
手吾草書
相近

盛字難解

一云暮去者、握之音為奈利、

住吉之名兒之濱邊爾馬立而玉拾之、久常不

所忘

雨者零借廬者作何暇爾吾兒之塩干爾玉者

將拾

奈吳乃海之朝開之奈凝今日毛鴨磯之浦回

爾亂而將有

亂者曰奈凝乃處ニ尔乱在也
塩去而浮ニ水ノ殘リタルヲ云

住吉之遠里小野之真捺以須禮流衣乃盛過

阿蓋奈之語

去

時風吹麻久不知阿胡乃海之朝明之塩爾玉

藻荇奈

住吉之奥津白浪風吹者來依留濱乎見者浮

霜

住吉之岸之松根打曝縁來浪之音之清羅

難波方塩干丹立而見渡者淡路島爾多豆渡

所見

四維活本作霜

巴一本也

羈旅作

離家旅西在者秋風寒暮丹鴈喧渡

圓方之湊之渚鳥浪立巴妻唱立而邊近著毛

年魚市方塩干家良思知多乃浦爾朝榜舟毛

與爾依所見

塩干者共滴爾出鳴鶴之音遠放磯回為等霜

暮名寸爾求食為鶴塩滿者與浪高三已妻喚

古爾有監人之覓乍衣丹摺年真野之捺原

和名近江滋賀郡真野

連庫山無考

朝入為等磯爾吾見之莫告藻乎誰島之泉郎

可將刈

今日毛可母與津玉藻者白浪之八重折之於

丹亂而將有

近江之海湖者八千何爾加君之舟泊草結兼

佐左浪乃連庫山爾雲居者雨曾零智否及來

吾背

大御舟竟而佐守布高島之三尾勝野之奈伎

萬葉集卷七

サニソ オモフ
左思所念

イッコニカ フナヒリシケム タカシモノカ トリノウラコ コキ
何處可舟乘為家牟高島之香取乃浦從已藝
テケルフ子
出來船

ヒ タビトノマ キ ナカステフニ フノカハコトハ カヨヘド フ子ソ
斐太人之真木流云爾布乃河事者雖通船曾

カヨハヌ
不通
御風按神名武大和國宇陀郡丹生神社是也然前後皆鳥嶺非可賦大和地名猶可考

アラレフリカ シニノイヒカケリ サキヲ ナミタカニスギテ ヤ ユカム コヒシキモノヲ
霰零鹿島之崎乎浪高過而夜將行戀數物乎

アヒカラノ ハコ子 トヒコエユクタツノ トモシキミレバ ヤマト シ オモホユ
足柄乃管根飛超行鶴乃乏見者日本之所念

ナツソ ヒクウナカミカタノ オキツス ニ トリハス タケト キミハ
夏麻引海上滷乃奧津洲爾鳥者篁竹跡君者

海上上總郡前
又在下總

オトモ セス
音文不為

古語拾遺云母麻乃生故謂之總國云云注古語麻謂之總以故為二總之冠時
麻夏所按者欣第十四東哥亦自此語

ワカサ ナルミ カタノ ウミノ ハマキヨミ イ ユキカヘラ ヒ ミレト
若狹在三方之海之濱清美伊往變良比見跡

アカヌ カモ
不飽可聞

イ ナミノ ハ ユキスキヌ ラ シ アニツタフヒ カサノウラニナミタテルミユ
印南野者往過奴良之天傳日笠浦波立見

シカマ エハ コキ スキヌ ラシ
一云思賀麻江者許藝須疑奴良思

イヘニ シ テワレハ コヒム ナイナミノ アサチカ ウヘニ
家爾之凶吾者將戀名印南野乃淺茅之上爾

テリシ ツキヨシ
照之月夜抄

アライソコスナミツ カシヨミ アハチ シミミステ ヤ スキム コ、タ チカキ
荒磯超浪乎恐見淡路島不見哉將過幾許近

推古紀曰舍人堂
於赤石仍蘇
于赤石檜堂之
園上
思賀麻播摩
郡名
和名抄作飾磨

桑自難波之邊思
其故御去山

乎
朝霞不止輕引龍田山船出將為日者吾將戀
香聞
海人小船帆毳張流登見左右荷朝之浦回二
浪立有所見
好去而亦還見六大夫乃手二卷持在朝之浦
回乎
鳥自物海二浮居而與津浪驂乎聞者數悲哭

好去幸甚

朝菜寸二真梶擲出而見乍來之三津乃松原
浪越似所見
朝入為流海未通女等之袖通沾西衣雖干跡
不乾
網引為海子哉見飽浦清荒磯見來吾
右一首柿本朝臣人磨之歌集出
山越而遠津之濱之石管自迄吾來含而有待
大海爾荒莫吹四長鳥居名之湖爾舟泊左右

御掛飽浦若
安樂歌第二
詠石見海話
相似

遠津水詳

阿サナキニマカチコキイテ、ミツコシミツノマツハラ
朝菜寸二真梶擲出而見乍來之三津乃松原
浪越似所見
朝入為流海未通女等之袖通沾西衣雖干跡
不乾
網引為海子哉見飽浦清荒磯見來吾
右一首柿本朝臣人磨之歌集出
山越而遠津之濱之石管自迄吾來含而有待
大海爾荒莫吹四長鳥居名之湖爾舟泊左右

手

フ子ハテ、カ

舟盡可志振立而廬利為名子江乃濱邊過不

勝鳥

和名唐韻云柯郡三音漢所入數系舟
煥卿梅漢書地理志柯郡注柯係船棧也楚莊踐伐夜郎軍至且蘭柯船於山浮步
戰既滅夜郎以柯船柯處名為柯元郎中置柯郡

妹門出入乃河之瀨速見吾馬爪衝家思良下

白栲爾丹保布信土之山川爾吾馬難家戀良

下

勢能山爾直向妹之山事聽屋毛打橋渡

水國之狹日鹿乃浦爾出見者海人之燈火浪

裝依次哥火
河蓋在真玉山
山

製云蓋自執山
越打橋而至妹
山

間從所見

麻衣著者夏櫪木國之妹背之山二麻蒔吾妹

右七首者藤原卿作未審年月

欲得裴登乞者令取具拾吾乎沾莫與津白浪

手取之柄二忘跡礮人之日師戀忘具言二師

有來

求食為跡礮二住鶴曉去者濱風寒彌自妻喚

毛

製藤原卿蓋
房之也

異也蓋海人
云三忘貝是異
物又言而已之
義

常夏云
下總國葛西ノ方言今モ枝ヲユリ之船ヲ繫テ可志ヲフルト云

紀伊

愛妹也

自

江本

江本

伊弉册神名也
御所神名也
直神是也

言思至浦島勝
於荒磯玉浦為
紀伊

瓜木俗云買太
毛詩註租
新茶

志遠之誤

藻刈舟奥榜來良之妹之島形見之浦爾鶴翔

所見

吾舟者從奥莫離向舟片待香光從浦榜將會

大海之水底豐三立浪之將依思有磯之清左

自荒磯毛益而思哉王之浦離小島夢石見

磯上爾爪木折燒為汝等吾潛來之奥津白玉

濱清美磯爾吾居者見者白水郎可將見釣不

為爾

奥津檣漸志夫乎欲見吾為里乃隱久惜毛
奥津波部都藻纏持依來十方君爾益有玉將
縁八方

一云奥津浪邊波布敷縁來登母

粟島爾許枳將渡等思鞠赤石門浪未佐和來
妹爾戀余越去者勢能山之妹爾不戀而有之

之左

嶺山思妹山之意之者不飽意

人在者母之最愛子曾麻毛吉木川邊之妹與

謂妹山

背之山

吾妹子爾吾戀行者之雲並居鴨妹與勢能山
妹當今曾吾行目耳谷吾耳見乞事不問侶
是代過而絲鹿乃山之櫻花不散在南還來萬

代

名草山事西在來吾戀千重一重名草目名國
安太部去小為手乃山之真木葉毛久不見者
蘿生爾家里

去蓋在之誤

神代紀有作深取魚此則河太養禰部始祖也諸說皆云阿太氏
通行之小為手山也山在紀伊

御曰方便是
清渡人之事
故方便二字
刻渡也

玉津島能見而伊座青丹吉平城有人之待問
者如何

鹽滿者如何將為跡香方便海之神我手渡海

部未通女等

玉津島見之善雲吾無京往而戀慕思者

黑牛乃海紅丹穗經百磯城乃大宮人四朝入

為良霜

若浦爾白浪立而與風寒暮者山跡之所念

御曰和名抄紀
伊國牟婁郡
有栗栖地蓋
同地

謂海土渡海上也

御日神々有
淡路國由良湊
神社然則湯等
在紀伊與淡路
之中間歟

為妹玉乎拾跡木國之湯等乃三埜二此日鞍

四通

引者動也

吾舟乃梶者莫引自山跡戀來之心未飽九二
玉津島雖見不飽何為而裹持將去不見人之

為

綿之底與已具舟乎於邊將因風毛吹額波不

立而

江本

大葉山霞蒙狹夜深而吾船將泊停不知文

狹夜深而夜中乃方爾鬱之苦呼之舟人泊兼
鴨

就夜中也第九卷中ニモテ 覺本キト同

神前荒石毛不所見浪立奴從何處將行與奇
道者無荷

翔所見

風早之三穗乃浦迴乎榜舟之船人動浪立良
下

伊勢神前蓋記

紀伊也三穗石室

大海之磯本由須理立波之將依念有濱之淨

奚久

大和歌

珠遇見諸戸山矣行之鹿齒面白四手古昔所

念

黑王之玄髮山乎朝越而山下露爾沾來鴨

足引之山行暮宿借者妹立待而宿將借鴨

視渡者近里迴乎田本欲今夜吾來禮巾振之

野爾

未通女等之放髮乎木綿山雲莫蒙家當將見

四可能白水郎乃釣船之網不堪情念而出而

來家里

之加乃白水郎之燒盐煙風乎疾立者不上山

爾輕引

右件歌者古集中出

大穴道少御神作妹勢能山見吉

吾妹子見偲與藻花開在我告與

君為浮沾池菱採我深袖沾在哉哉然哉
妹為管實採行吾山路感此日暮
イモカタメスカノミ トリテユクワレツヤマチ マトヒテコノヒ クラレツ

右四首柿本朝臣人麿之歌集出

問答

河上カハノホル 佐保河爾鳴成智鳥何師鴨川原乎思努比益
サ ホ カハニ ナクナルチ トリナニシ カモカハラ ヲ シヌヒ イヤ

人社者意保爾毛言目我幾許師奴布川原乎
ヒトコソハ オホニモ イハメ ワカコ、タシヌ フカハラ ヲ
標結勿謹シメユフナユメ

右二首詠鳥

神樂浪之思我津乃白水郎者吾無二潛者莫
サ ナミノニシカツノ アマ ハ ワレナシニ イカリハ ナ
為浪雖不立セツナミタ、ス トモ

大船爾櫂之母有奈牟君無爾潛為八方波雖
オホフ子ニ カキシモ アラナム キミナシニ イカリセメヤ モ ナミタ、
不起ストモ

右二首詠白水郎泉

臨時

月草爾衣曾深流君之為綠色衣將摺跡念而
ツキクサニ コロモソ ソムル キミカ タメイロトルコロモス ラムト オモヒテ

養殿居之語相
連也常由可須
養為流布時能
夜麻備尔云
聖武帝皇母并
上内親王之名
本此地子
并上内親王光
仁天皇后

聖武帝皇母并
上内親王之名
本此地子
并上内親王光
仁天皇后
者一本無
聖武帝皇母并
上内親王之名
本此地子
并上内親王光
仁天皇后

御覽曰此其難
解諸說不足取
是序哥而唯言
其苦勞待地而
已宜越下為讀
拾穂云向如字
自助語許里德
也言一人出西市
而買惡絹故
懲而也
數言自許里頻
也今俗云不見
而談詰為志許
利天談是也

ハルカス三升ノウヘニ
夕、ニ
ミチハ
アシト
キミニ
アハム
ト
タモトホリ

春霞井上

從直爾道者雖有君爾將相登他回

來毛
道邊之草深由利乃花咲爾咲之柄二妻常可

云也

不可謂也

默然不有跡事之名種爾云言乎聞知良久波

少可者有來

佐伯山于花以之哀我子鴛取而者花散朝

不時斑衣服欲香衣服針原時二不有朝

山守之里邊通山道曾茂成來忘來下

足病之山海石榴開八岑越鹿待君之伊波比

孀可聞

曉跡夜鳥雖鳴此山上之木末之於者未靜之

西市爾但獨出而眼不並買師絹之商自許里

鴨

今年去新島守之麻衣肩乃間亂者許誰取見

大舟乎荒海爾擲出八船多氣吾見之兒等之

萬葉集卷七

二

五

上笑方意三ツノ意三ツラス城ノベノホノ上巨書カト

源遠道花ノニ卷ノ猶アノニ三詞ノ注ニ細流ニ此等ヲ列リ查句古点ニハ猶アラントヨメルニ暗吟
日記上モ此事有胸句トナシカサニトアリ此本ニ事ニ各種トアリイカ、却中ニ集中ニモク同ノ大キ
ミタト假名モ書クハ、ハテノ点ヲヨシトス、常夏梅ノ集、列ノ異ノ物ハニ云、ト書待、トナ
ニ種上云トアルニニタカヒノ書ヲ今本ニハニ云脱落、聖武帝皇母之誤セリ又種ナリトナヨミア
カハレワカコ、ツレトリテハ、ハナチリ又トモ

草衣リテ道
ヲ志也

齊

筑紫太宰官也

和名新唐韻云
西夷又漢批云
萬年布云字流
繒欲壞也

目見者知之母

就所發思

旋頭歌

百師木乃大宮人之踏跡所與浪來不依有勢
婆不失有麻思乎

右十七首古歌集出

兒等手乎卷向山者常在常過往人爾往卷目

八方

卷向之山邊響而往水之三名沫如世人吾等

者

右二首柿本朝臣人磨歌集出

寄物發思

隱口乃泊瀨之山舟照月者盈具為鳥人之常

無

右一首古歌集出

行路

遠有而雲居爾所見妹家爾早將至步黑駒

言雖月盈長而常潤天何人而無半

是

陸奥篇濱成式
ヲ引テ云常麻大
夫陪駕伊勢思
婦哥曰ト云

御風云奈此心茶
之誤

斜者言也衣而
將故

高天原ハ梯ヲ立
テクニ故ニ方イヒカ
ケリ
臣神主ト云
其録也
如各板梯ハ木階
所以登高也

アツサユミヒキツノヘ ナル十ノリソノハナツムニテハアハサ ラメ ヤモ ナリ
梓弓引津邊在莫謂花及採不相有目八方勿
ソノハナ 筑前名所抄 契云方葉十筑前引津亭ト云所ニ非

謂花

為逢我好故行宮路

數多往來故故

ウチヒ サスニヤチヲユクニ ワカモ ヤフレヌタマノシノオモヒステ、モイヘニアラミシヲ
擊日刺宮路行丹吾裳破玉緒念委家在矣

君為手力勞織在衣服斜春去何何摺者吉

橋立倉椅山立白雲見欲我為苗立白雲

橋立倉椅川石走者裳壯子時我度為石走者

裳

拾穂云流水之裳

ハシタテノクラハシカハノカハノシツスケワレカリテカサニモ アミス カハノシツスケ
橋立倉椅川河靜管余荊笠裳不編川靜管

高職

杜

ハルヒ スラタニタチツカルキミハマハレワカクサノツマナキイミカタニタチツカル
春日尚田立羸公哀若草嫺無公田立羸

開木代來背社草勿手折已時立雖榮草勿手

折 御風日本紀神代上云又生天吉草也注天吉草此云阿麻乎能乎佐國四維云是依生非草下亦之物所
記欲吉草之義我如字志加及佐也神代上云為湯津瓜橋而神御影因茲則月者貝詩言連青
角髮香云也又以青角髮冠冠之詔歟

青角髮依網原人相鴨石走淡海縣物語為

水門葦末葉誰手折吾背子振手見我手折

垣越犬召越鳥獵為公青山葉茂山邊馬安君

海底與玉藻之名乘曾花妹與吾此何有跡莫

語之花

神代卷天吉草云
吉草香角髮及同
政重祥也即龜
之高也角髮
和名鹿野也
御風曰水門字
不可訓門本留
宜訓美奈奈乃
或云門下脫在
字歟

然下恐脫莫字

江林蓋地名

在雪降後謂登之
之言也登之者登之
也

批目錄則于四
首也然則右
之語多在春日
五可下

萬葉卷七

二

クサニセム

コノシカニクサカルワラハ、シカナカリツアリツ、モキニカキニサムミ、
此崗草薊小子然薊有乍君來座御馬草為

江林次完也物求吉白栲袖纏上完待我背

九雪降遠江吾跡川揚雖薊亦生云余跡川揚

朝月日向山月立所見遠妻持在人看乍偲

右二十三首柿本朝臣人磨之歌集出

春日在三笠乃山二月船出遊士之飲酒杯爾

陰爾所見管

譬喻歌

相聞也

契下蓋首
脱字

各

十依當作子依
子依可訓年礼
多流

寄衣

新衣喻美人

一本作者

喻本觀

今造斑衣服面就吾爾所念未服友

紅衣深雖欲著丹穗哉人可知

千名人雖云織次我二十物白麻衣

寄玉

安治村十依海船浮白玉採人所知勿

遠近磯中在白玉人不知見依鴨

海神手纏持在玉故石浦迴潛為鴨

萬葉集卷七

二

クサニセム

ワタツミノモタル シラタマミマクホリチ カヘリツケツカツキスルア
海神持在白玉見欲千遍告潜為海子
カツキスルアマハ ツクトモワタツミノコ、ロラエヌテハミルト イハナクニ
潜為海子雖告海神心不得所見不云

寄木

契云志蓋志之誤言我思太深故木葉亦知吾心

アマクモノタナヒクヤミニカクタルワカワスレメヤコノハ シルラム
天雲棚引山隱在吾忘木葉知

ミレト アカヌ ヒトクニヤモノコノハツソオノカコ、ロニツツカシクキモフ
雖見不飽人國山木葉已心名著念

知下疑良無三字
人國山在吉野
下三十三字裏
有云之哥故也

寄花

コノヤミノモ三千ノシタノハナナヲ ワカハツノニミテカヘルコヒシモ
是山黃葉下花矣我小端見及戀

孟冬、暖時所開之花也

寄川

コノカハニ フチモユクヘクアイトイヘトワタルセ、コトニモルヒトアリ
從此川船可行雖在渡瀬別守人有

寄海

オホウミマモルミナトノコトアルニ イツクニキミカワレ井 シノカム
大海候水門事有從何方君吾率陵

カセフキテウミハアルトモア ストイハ、ヒサシカルヘシキミカマニ
風吹海荒明日言應及君隨

クモカクレヲ シモノカニ丸 カシコクハメハヘタツトモコ、ロヘタツ
雲隱小島神之忍者目間心間哉

右十五首柿本朝臣人麿之歌集出

寄衣

ツルハミノキヌキシヒトハコトナシト イヒシ トキヨリキマホシクオホユ
椽衣人者事無跡日師時從欲服所念

如伊豫國風土記
者身長足日女
命御教也

凡爾吾之念者下服而穢爾師衣乎取而將著

八方

紅之深染之衣下著而上取著者事將成鴨

椽解濯衣之恠殊欲服此暮可聞

橘之島爾之居者河遠不曝縫之吾下衣

寄絲

河内女之手深之絲乎絡反片絲爾雖有將絕

跡念也

寄玉

海底沈白玉風吹而海者雖荒不取者不止

底清沉有玉乎欲見千遍曾告之潛為白水郎

大海之水底照之石著玉齊而將採風莫吹行

年

水底爾沈白玉誰故心盡而吾不念爾

世間常如是耳加結大王白玉之結絕樂思者

伊勢海之白水郎之島津我顛玉取而後毛可

夫

和名抄中准島錫良經三石決明食之心目聰了亦附石生故以名之

萬葉集卷七

三十一

石金之凝木敷山爾入始而山名付深出不勝

鴨

佐保山乎於凡爾見之鹿跡今見者山夏香思

母風吹莫勤

奧山之於石蘿生恐常恩情乎何如裳勢武

思贖痛文為便無玉手次雲飛山仁吾印結

寄草

冬隱春乃大野乎燒人者燒不足香文吾情熾

勝

和名秋本州主孫
一名黃孫和名治
波利久住此云云
知波利
御風梅本草集
解別録曰主孫生
海西川谷及海南
城郭垣下足等
云葛又延赤文整
相告
○形の以のま
○影のまのま
○影のまのま
○影のまのま

葛城乃高間草野早知而標指益乎今悔拭

吾屋前爾生土針從心毛不想人之衣爾須良

由奈

鴨頭草丹服色取摺目伴移變色登俣之苦沙

紫絲乎曾吾擗足檜之山橘乎將貫跡念而

真珠付越能管原吾不茹人之茹卷惜管原

山高夕日隱奴淺茅原後見多米爾標結申尾

事痛者左右將為乎石代之野邊之下草吾之

オイ

和名秋大和葛市郡雲梯

刈而者

一云紅之寫心哉於妹不相將有

真鳥住卯名手之神社之菅根乎衣爾書付令

服兒欲得

常不人國山乃秋津野乃垣津幡鴛夢見鴨

姫押生澤邊之真田葛原何時鴨絡而我衣將

服

於君似草登見從我標之野山之淺茅人莫苴

根

三島江之玉江之薦乎從標之已我跡曾念雖

未苴

如是為而也尚哉將老三雪零大荒木野之小

竹爾不有九二

淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而信有得哉

戀敷鬼乎

月草爾衣者將摺朝露爾所沾而後者徙去友

袋振衣水在山城拾標砂至其度茂西神名式本和國宇智郡荒木神社

公雲梯津國

標

喻美人

葛衣

三雪降之時則甚葉其委弱似老

萬葉集卷七

三十一

吾情湯谷絶谷浮尊邊毛奥毛依勝益士
自三月至七月
通名録專味甜
體軟霜降以後
至二月名理專味
若體淡

ワカコ、ロユ タニタユタニウキヌハニモ オキニモ ヨリカタマエラ
吾情湯谷絶谷浮尊邊毛奥毛依勝益士

寄稻

石上振之早田乎雖不秀繩谷延與守乍將居

寄木

白管之真野乃榛原心從毛不念君之衣爾摺
真木柱作蘇麻人伊左佐目丹借廬之為跡造

計米八方

向峯爾立有桃樹成哉等人曾耳言為汝情勤

以在母之園之葉
喻處也

足乳根乃母之其業桑尚願者衣爾著常云物

乎

波之吉也思吾家乃毛桃本繁花耳開而不成

在目八方

向岡之若楓木下枝取花待伊間爾嘆鶴鴨

寄花

氣緒爾念有吾乎山治左能花爾香君之移奴
良武

和名秋葉名死楓名
楓名加三言如
三言指而香謂之
同秋三言名死云
挂一名計漫三言和
名加三言良
御風松古事紀訓
楓及香木字為加
都且然則葉中
柱同物秋或云天
曆地用固柱勝高
去柱未詳出何書
以俟後案耳

越前高野白治庄本似馬醉水而大皮白緻密葉圓而小也孟
夏未有白花
和名秋葉名死楓名
和名秋葉名死楓名
和名秋葉名死楓名

スミノエノ アササハシノ カキツ ハタキ又ニ スリツケキムヒ
墨吉之、淺澤小野之、垣津幡衣爾、摺著、將衣日

不知毛

アキサラハ カケニモ セムト ワカマキン カラアサノ ハナヲ タレカツミ
秋去者、影毛將為跡、吾時之、韓藍之花乎、誰採

家牟

カスカ スニ サキタルハキ ハ カタエタハ イマタフ、メリコトナ タ
春日野爾、咲有芽子者、斤枝者、未含有言、勿絕

行年

ミクホリコヒツ、マナシ アキハキ ハ ハナノミサキテ ナラス カモ
欲見、戀管待之、秋芽子者、花耳開而不成、可毛

將有

ワギモ コガヤドノ アキハキ ハナヨリハ ミニナリテ コソ
吾妹子之、屋前之、秋芽子、自花者、實成而許、曾

戀益家禮

寄鳥

アスカカハナ、世ノ ヨトニ スムトリモ コ、ロアレハコソナミタ、
明日香川、七瀬之、不行爾、住鳥毛、意有社、波不

立目

寄獸

三國山、木末爾、住歷、武佐左妣、乃此、待鳥如、吾

俟將瘦

侍名

籠鼠食鳥故須鳥我亦知籠鼠之須鳥而常君故將瘦

彌羅卷七

寄雲

石倉之小野從秋津爾發渡雲西裳在哉時乎
思將待

寄雷

天雲近光而響神之見者恐不見者悲毛

寄雨

甚多毛不零雨故庭立水大莫遊人之應知
久堅之雨爾波不著乎堆毛吾袖者干時無香

思高貴之人詠

寄月

三空往月讀壯士夕不去目庭雖見因緣毛無
春日山山高有良之石上管根將見爾月待難
闇夜者辛苦物乎何時跡吾待月毛早毛照奴

此寄有寄管根
意最深

賀

朝霜之消安命為誰千歲毛欲得跡吾念莫國
右一首者不有譬喻歌類也但闇夜歌人所
心之故並作此歌因以此歌載出此次

寄赤土

山跡之宇陀乃真赤土左丹著曾許襄香人之
吾乎言將成

寄神

木綿懸而祭三諸乃神佐備而齋爾波不在人
目多見許增
木綿懸而齋此神社可超所念可毛戀之繁爾

寄河

不絕逝明日香川之不逝有者故霜有如人之

見國

明日香川湍瀨爾玉藻者雖生有四賀良美有

者靡不相

廣瀨川袖衝許淺乎也心深目手吾念有良武
泊瀨川流水沫之絕者許曾吾念心不遂登思

齒目

名毛伎世婆人可知見山川之瀧情卒塞敢而

天武紀卷大忌神
廣瀨坐神
此川古所
流也今
水也
今
也

萬葉集卷七

三十一

八

幾阿及加

...

有鴨ルカモ

水泳隱爾氣衝餘早川之瀨者立友人二將言八

寄埋木

真鉞持弓削河原之埋木之不可顯事等不有

君

寄海

大船爾真梶繁貫水手出去之與將深潮者干

去友トモ

伏超從去益物乎間守爾所打沾浪不數為而

繁

磯之浦爾來依白浪反乍過不勝者雉爾絕多

倍

淡海之海浪恐登風守年者也將經去擄者無

二

等蓋亦之誤

諸説大和地名

亦本
又同

波起之間

岸

アサナキニキヨルヒラナミミクホリワレハスレドモカセコソヨセ
朝奈藝爾來依白浪欲見吾雖為風許增不令
依

寄浦沙

愛子地非地名真左吉地也

△ラサキノナタカノウラノマナコチニソテノミフレテ子スカナリナム
紫之名高浦之愛子地袖耳觸而不寐香將成

トヨクニノマノハニベノマナゴチノマナクニシアラハナニカ
豐國之間之濱邊之愛子地真直之有者何如

將嘆

寄藻

シホミテハイリヌルイツノクサナレヤミクスクナクコフラクノ
塩満者入流磯之草有哉見良久少戀良久乃

太寸

オキツナミヨスルアライツノナノリソハコノウチニトクトナリケリ
奥浪依流荒磯之名告藻者心中爾疾跡成有

△ラサキノナタカノウラノナノリソノイツニナヒカムトキマツワレシ
紫之名高浦乃各告藻之於磯將靡時待吾乎

アテイツコソナミハオソロシレカスカニウミノタマモノニクハアラズ
荒磯超浪者恐然為蟹海之玉藻之憎者不有

手

寄船

サ、与ナミノシカツノウラノフナノリニノリニシコ、ロツ子
神樂聲浪乃四賀津之浦能船乘爾乘西意常

不所忘

谷所書名高浦
紀伊
郡
豐前
可劫
聞
郡

百傳八十之島迴乎榜船爾乘西情忘不得裳
島傳足速乃小舟風守年者也經南相常齒無

二

水霧相與津小島爾風乎疾見船縁金都心者

念杼

殊放者與從酒嘗湊自邊著經時爾可放鬼香

旋頭歌

三幣帛取神之祝我鎮齋杉原燎木伐殆之國

手斧所取奴

殆者俗云毛知都登傳ト云ル詞也
手斧者用匠斧也

挽歌

雜挽

鏡成吾見之君乎阿婆乃野之花橘之珠爾拾

橘實喻珠

都

懸于詞也

蜻野川人之懸者朝蔣君之所思而嗟齒不病
秋津野爾朝居雲之失去者前裳今裳無人所

念

檢櫻文以珠璣

妹最大好

コモリクノハツセノヤマニカスミタナヒククモハ イモニカモアラム
隱口乃泊瀬山爾霞立棚引雲者妹爾鴨在武
マカコトカサカサトカカコモリクノハツセノヤマニイホリトイフ
枉語香逆言哉隱口乃泊瀬山爾廬為云
アキヤマニモミチアハレトウラフレテイリニシイモハミドキマサヌ
秋山黃葉何怜浦觸而入西妹者待不來
ヨノナカハマコトフタヨハユカサラシスキニシイモニアハヌオモハ
世間者信二代者不往有之過妹爾不相念者
サイヤノイカトルヒトカクロカミノシロクナルマテイモカオトヲキク
福何有人香黑髮之白成左右妹之音乎聞
ワカセコヲイツチユカメトサキタチノソカヒニ子ニク
吾背子乎何處行目跡碎竹之背向爾宿之久
イマシクヤシモ
今思悔裳
ニハツトリカケケノタルヲノシタリヲノナカキコロモオモホ
庭津鳥可鷄乃垂尾乃亂尾乃長心毛不所念

玉梓者梓水也賞而玉梓妹

鴨 カモ
コモマクラアヒマキシコモアラハコソヨノフクラクモワレヲシ
薦枕相卷之兒毛在者社夜乃深良久毛吾惜
責 メ
タマツサノイモハタマカモアシヒキノキヨキヤマヘニメケハチリヌル
玉梓能妹者珠氈足永木乃清山邊蒔散深
或本歌曰
タマツサノイモハハチカモアシヒキノコノヤマカケニニケ
玉梓之妹者花可毛是日木乃此山影爾麻氣
者失留 ハチリヌル
羈旅歌

撰津

十コノウミヲアサコキクレハウミナカニカコソ十クナル
名兒乃海乎朝榜來者海中爾鹿子曾鳴成恻
ハレソノカコ
怜其水手
嘆之誤字

萬葉集卷第七

